障がい当事者団体との出会いからバリアフリー事業へ
２本の事業を柱に施設をエンパワメント

「パティオバリアフリー事業」の取組

知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）（一般財団法人ちりゅう芸術創造協会）

戸谷田 知成
一般財団法人ちりゅう芸術創造協会 事務局長補佐
芹澤 由貴
一般財団法人ちりゅう芸術創造協会 事業係 リーダー

平成28年、障がい当事者団体からの呼びかけに応じてイベントを開催。この経験を足がかりに、「パティオバリアフリー事業」を立ち上げ、演劇や音楽鑑賞を毎年計画的に実施している。建設時から備わった施設の優位性に加え、鑑賞サポートサービスを提供することで、ハード、ソフトの両面から、多様な方へ鑑賞の機会を提供している。加えて、障がい当事者団体と毎年イベントを実施し、施設の価値を高めている。

●事業の目的

社会包摂という観点を重視し、劇場のソフトやハードのバリアフリー化の推進を通じて、障がいのある方もない方も一緒に鑑賞する機会をつくり、地域における共生社会の成熟を促す一助となることを目指す。

●事業を始めたきっかけと事業の変遷

【当事者団体と共催イベントの実施】

建設時からバリアフリーを意識した建物となっており、主要施設は１階に集約され、駐車場から大ホール（かきつばたホール）内の車椅子席までは段差がなく、２階やバルコニー席へのアクセスにはエレベーターが設置されているなど、体の不自由な方などにも来ていただきやすい環境があった。また、本事業実施以前から、事業によっては地元業者による福祉タクシーでの送迎サービスなども行っており、「バリアフリー事業」に取り組みやすい土壌があった。

平成28年に市内の５つの障がい者団体が結集した知立障がいフォーラム「リング C」*のイベントに協力を求められたことがバリアフリー事業のきっかけとなった。当時の当協会理事長が、これからの時代には福祉との連携事業が必要だと考えていたこともあり、「リング C」からの提案を受け入れ、共催で実施することになった。開始年初から関連団体と連携し、当事者と意見交換をしながら事業を始められたのは、恵まれていたと思う。

＊リング C：知立市の障がい者各団体（身体、聴覚、精神、知的）が協力して活動する団体。障がいのある人も知立市民として安心して暮らして行けるよう、多くの方と交流をもち、共に協力し、希望のある社会づくりに参加することを目的としている。

【「東京演劇集団 風」のバリアフリー演劇の上演】

平成29年度に行った高校生対象の芸術鑑賞会をきっかけに「東京演劇集団 風」とのつながりができ、令和元年度から３年計画で、手話通訳者が役者と一緒に舞台に立って上演するなど鑑賞サポートを付けたバリアフリー演劇の上演を行った。

また、平成30年度には愛知県芸術劇場・SPAC共同企画『寿歌』、iaku『粛々と運針』、令和４年度は手話をパフォーマンスに取り入れた音楽公演「HANDSIGN LIVE」、令和５年度は第七劇場『三人姉妹』とジャンルを変え、鑑賞サポートを付けた鑑賞事業を実施している（サポートの内容は主な実施内容を参照）。

【草の根フェスティバル】
障がいのある方が積極的に社会参加をする意欲を高めることと、障がいのある方への市民の関心、理解を深めることを目的としたフェスティバル。令和元年度から毎年１回、共催で実施している（令和2、3年度はコロナ禍のため中止）。職員は「草の根フェスティバル」の実行委員としても継続的に参加しているが、主導するのではなく、市民の発想を大切にし、必要に応じて劇場職員としてサポートをするというスタンスを取っている。

●主な実施内容

年度	事業名	鑑賞サポート内容例
平成28年度	知立障がいフォーラムリング C 「ハートフルコンサート」（共催）	字幕、映像、手話通訳、要約筆記
平成30年度	iaku公演『粛々と運針』	字幕、アフタートークの手話通訳、 要約筆記
平成30年度	愛知県芸術劇場・SPAC共同企画 『寿歌(ほぎうた)』	舞台模型による開演前舞台説明
令和元年度	東京演劇集団 風 『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち～』	開演前舞台説明、音声ガイド、手話演者、 手話通訳、字幕、舞台タッチツアー、 優先入場
令和2年度	東京演劇集団 風『星の王子さま』	
令和3年度	東京演劇集団 風『Touch ～孤独から愛へ～』	
令和4年度	HANDSIGN LIVE	出演者手話、手話通訳、字幕、映像
令和5年度	第七劇場『三人姉妹』	手話通訳、字幕、聴覚補助、優先入場
令和元年～	草の根フェスティバル*（共催）	手話通訳、字幕、映像、要約筆記

*令和2年、3年はコロナ禍のため中止

『粛々と運針』の字幕による聴覚サポート

『寿歌』の舞台模型による視覚サポート

『星の王子さま』に、障がいのある方もない方も舞台参加

●実施体制・研修

【実施体制】
バリアフリー事業を担当したことがある職員は現在３名。１事業を１名が担当し、年間２～３本のバリアフリー企画を実施している。事業実施のために補助金を獲得するなど、施設全体で体制を整えている。バリアフリー事業に向けた意識は共有しつつ、鑑賞サポート等の取組内容については、各担当者で判断して実施している。

【職員研修】
・経験を重ねながら学んでいったことが多い。例えば、当初はすべて手話通訳で伝えるものと思っていたが、「開場中」と看板一つ出すだけでよいというようなことや、要約筆記者や手話通訳者を関係団体に依頼したときに必要な人数がわからず多めに頼みすぎて指摘を受けるなど、経験から学んだ。
・実施にあたり視覚障がい者の誘導体験や知立市の手話講座（初心者向け）の受講などの職員研修を行った。また、日常的に所内で朝礼の時にミニ手話講座を実施している。

●障がい当事者・関係団体との連携

【当事者の参加・意見】

避難訓練コンサートに聴覚障がいのある方が参加されたこともある。救助方法･避難誘導の説明や挨拶に字幕と手話通訳のどちらもなかったなど行き届かなかった部分がわかり、障がいのある方々に対して日頃からどのように備える必要があるか参考になった。

【福祉関係団体等との連携】

リング Ｃとの連携は草の根フェスティバルを中心に日常的にもコミュニケーションをとっている。その他、知立市社会福祉協議会（バリアフリー事業全般）、愛知教育大学（平成３０年度）、名古屋芸術大学（第七劇場『三人姉妹』）などと連携している。

「リングC」とのつながりが生まれた
「ハートフルコンサート」の一コマ

【他の劇場・音楽堂への情報発信】

他の劇場でもバリアフリー事業に取り組めるということを伝えたいと思い、近隣県の施設に招待状を送り、視察に来ていただいている。当施設でできることは小さいが、他の劇場等を巻き込むことで、事業のバリアフリー化が広く浸透していくことを期待して発信している。

●事業担当者の感想と施設の変化

・当事者の状況を改善したいと思う一方、してほしいことを何度も聞くのは負担になると思われる。ハード面の改良への要望は当事者には「何度言ってもやってくれない」という気持ちが芽生えることもある。100%を目指しても達成できず、常に新しい課題が生まれている。

・本事業をきっかけに、当事者団体や劇団、他施設とのつながりを経験し、自分の担当する他の事業でもつながりを深く意識するようになった。接点がないところとも、この作品をきっかけにつながれるのではないかなど、発想を広げていけるようになった。

・鑑賞サポートは障がいのある方と同じ場に共に居合わせることで、日常生活ではなかなか知りえない障がい当事者に必要なサポートを体験として知ることができるよい機会。作品の感動も伴い、より深い共感につながると思っている。

・もともとハード面のバリアフリーが特徴の施設だったが、それを顕在化できたのではないか。無料コンサートやクリスマスイルミネーションには、赤ちゃん連れのお母さんや高齢者福祉施設の団体がいらしたりなど、もともと多様な方を受け入れるマインド・土台はできていたが、ハートフルコンサートをきっかけに､具体的に付加価値を付けた事業として展開できた。そのような志をもつ担当者が一人いると、思いは施設全体に共有されていくと思う。

・事業の波及効果として、草の根フェスティバルがここで開催されるようになったことが、バリアフリー事業に踏み出すステップとなった。この地域のもう一つの課題である多文化共生に対する事業を始められたことも、一つの流れとしてつながっていると思う。

●設置自治体の評価

本市の文化芸術推進計画の基本施策１では「共生社会の実現」が謳われ、「障がい者・外国人市民等が体験しやすい機会づくり」という項目が盛り込まれている。５つの重点施策でも、３つ目に「障がい者の文化活動の機会の充実」が謳われている。文化芸術推進計画の策定は令和３年であり、策定以前からの当館の活動が反映されているだけでなく、施設として進めていくことを後押ししていただいていると理解している。そういう点からも設置者には、活動の後ろ盾になり、見守っていただいていると感じている。
公立施設は社会的な価値を高めていくことが本来だと思うので、施策に盛り込まれることも重要だと思う。

●事業の課題

鑑賞サポートをすべての公演につけたほうがよいことはわかっているが、それを公演担当者が１人で行うには時間も予算も足りない。「東京演劇集団 風」の「バリアフリー演劇」公演は、鑑賞サポートもパッケージになっていたために実施できた面がある。バリアフリー事業以外の公演については、事前連絡なしで来場し鑑賞していただくことは、障がいによっては難しいことがある。来場いただけるのは嬉しいことだが、実際に当日に障がいを把握した場合どこまで対応できるかについては大きな課題であり、サービスの日常化を目指して今後検討をしていきたい。
また、バリアフリー事業については集客のための周知方法や企画自体のアイディア探しなども継続に向けた課題と感じている。

●今後の展開

バリアフリー事業としては令和６年度も前回好評であった「HANDSIGN」の公演を予定しているが、別のジャンルのアーティストを交えるなど、見せ方を変えた手話パフォーマンスもあるのではないかと考えている。固定ファンだけでなく、新しい観客にも出会えることを期待している。今後は、これまでの事業の中でつながりのできた実演団体との縁を大切にして、バリアフリー事業と草の根フェスティバルという核となる事業を柱に、参加型事業などを加えていければと考えている。それらを継続することにより、少しずつ合理的配慮でできることを増やし、多くの方への鑑賞機会を広げていきたい。

令和４年度に実施した「HAND SIGN LIVE」のチラシ

【「パティオバリアフリー事業」事業データ】

開　　始	平成28年度
入　場　料	公演による。一例として、令和５年度の演劇は一般2,000円　※障がい者（介助者含む）割引あり
補　助　金	文化庁文化芸術振興費補助金 劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業（地域の中核劇場・音楽堂等活性化）独立行政法人日本芸術文化振興会　等を活用
広　　報	会館の広報誌、市の広報誌、会館ホームページに加え、リングＣなど事業の関連団体や関与する大学等への案内を実施
その他の活動	平成30年度【山車文楽】視覚障がいのある方にも地元の文化財である山車文楽を体感していただくため、山車の模型や文楽人形に触れたり、実物大の山車に触れたりする体験を実施 【講座】身近にあるバリアフリーやユニバーサルデザインの発見を通して、見えない、見えにくい方の世界観を体験するワークショップを実施

知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）

所在地：〒472-0026　愛知県知立市上重原町間瀬口116
TEL：0566-83-8100
設置者：知立市
開　館：2000年
管理者：一般財団法人ちりゅう芸術創造協会
規　模：かきつばたホール（1,004席）/花しょうぶホール（293席）
施設の特徴：かきつばたホールと花しょうぶホール、日常的なワークショップ機能を備えたワーキングエリアからなる総合文化施設。約16 km²のコンパクトな市のほぼ中心に位置し、多彩な事業を提供している。

ホームページ：https://patio-chiryu.com/

パティオ池鯉鮒施設外観

※写真はすべて知立市文化会館提供